

ブグト碑文のソグド語版について

吉 田 豊

0 はじめに

ブグト碑文はモンゴル共和国で見つかった3つのソグド語碑文の一つで、最古のものである。残りの2つはカラバルガスン碑文、セヴレイ碑文である。¹ブグト碑文は1956年にアルハンガイ＝アイマク、イフタミル＝スム、ブグトにあるハールガティン＝ヘレクスル遺跡（北緯47度49分、東経101度16分）で出土した。現在はツェツェルレク市のアルハンガイ県博物館の中庭に、雨ざらしの状態で保管されている。碑文の構造や大きさについては本論文の末尾の図1を参照されたい（森安・オチル 1999, plate 1a から転載）。

碑文の全4面に文字は刻まれている。仮にソグド語面を正面と考えると、縦書きのソグド語のテキストは左側面（B1）に5行、正面（B2）に19行、右側面（B3）に4行の銘文が見える。²内容もこの順である。右上部は大きく破損していて、B2面の後半とB3面では銘文の後半部しかテキストを回収できない。裏面は縦書きのブラーフミー文字のテキストである。これについては下記も参照されたい。

ブグト碑文の発見とその後の研究については、1971年までは護雅夫 1972, 同（1976: 208-228）が詳しい。その後1999年までの研究状況は吉田・森安 1999 に解説がある。³それ以降では、銘文の読みや内容についてやや詳しく扱った論文に吉田 2011 がある。要するにソグド語面の研究は、実質的には筆者が吉田・森安 1999 年に提出したテキストと英訳及び和訳の段階でとどまっている。これは1997年に当時大阪大学文学研究科

¹ カラバルガスン碑文とセヴレイ碑文については、各々とりあえず吉田 2011 と吉田 2007 を参照せよ。

² B3面の4行目で文章が終わっている訳ではないので、今は失われた碑文上部に5行目があり、そこで銘文全体が終わっていたと考えられる。

³ 森安・吉田 1998 には、1997年に筆者が現地で拓本を読んだときの発見のいくつかが簡報として報告されている。

の教授であった森安孝夫教授が組織した、モンゴルにおける碑文と遺跡の調査チームが作成した拓本に基づいた読みであったが、Livšic が写真に基づいて作成したテキストと翻訳を大幅に改善できた。筆者は 2003 年 6 月に Collège de France において、このソグド語銘文の文献学的研究と、銘文から回収できる歴史に関して講義を行う機会があった。その折に筆者のテキストと翻訳を、先に出版された Livšic のそれとを対照して見られるようにしたハンドアウトを配布した。しかしこれは少なくとも形式的には非公開であった。要するに、刊行されたテキストと訳、訳注としては Kljaštorny/Livšic のものしかなく、それは 1972 に刊行された英語版に代表されている。⁴ このように筆者が提出したのはテキストと翻訳だけで、その根拠を示す文字の読みの注釈や語注は発表していない。今回ここに正式にテキスト、翻訳、注釈を発表することにした。その背景は以下の通りである。

ドイツの D. Maue 博士は、近年モンゴル高原で発見された縦書きのブラーフミー碑文 (Khüis Tolgoi 碑文) についての研究を進められ、書かれている言語は従来知られているどの言語でもなく、おそらくは柔然が話していた言語で、近年 Para-Mongolic と呼ばれている言語を表記したものであるというショッキングな、それでいて決して荒唐無稽ではない見解を、2017 年 8 月にハンガリーで開催された PIAC (国際アルタイ学会議) で発表された (D. Maue et al. forthcoming)。彼はそれに先だってブグト碑文のブラーフミー面も同じ言語で書かれているという確信を持たれ、RTIViewer という最新のテクノロジーを使って写真を撮影し解読する計画を立てられた。そして 2015 年にはイスタンブールの M. Ölmez 教授を介して、トルコ政府からの援助を得てその計画を実行に移された。モンゴルには Maue 博士とトルコ学の Ölmez 教授に加えて、中央アジア史の de la Vaissière 教授、アジアの古言語を専門とする A. Vovin 教授、写真撮影の専門家が同行された。こうして撮影された写真を筆者が見る機会はなかったのだが、2018 年 8 月末に、キルギズの首都ビシュケクで PIAC が開催されることになり、Maue 教授はそこにブグト碑文に関する一つのパネルを開く計画を立てられた。ところ

⁴ ほぼ同じ内容の論文がロシア語 (Kljaštorny / Livšic 1971)、英語 (Kljaštorny / Livšic 1972) そしてトルコ語 (Kljaštorny / Livšic 1987) で発表されている。ただ掲載された写真は同じではない。しかしながら、この種の論文で掲載された質の悪い写真から銘文を解読することはおろか、提出されたテキストの読みをチェックすることすら実質的には不可能である。

が、ソグド語版と歴史背景を担当するはずの de la Vaissière 教授が、7 月の中頃になって出席できないことになった。Maue 博士は急遽筆者に代役を依頼して来られたので承諾したところ、この新しい写真の提供を受けることができた。ここに発表するテキストと翻訳は、この新写真も参考にしているが、実際は拓本に基づく筆者の従来の読みをわずかに改善できるだけであった。

本論文は以下のような構成になっている。第 1 部に Livšic の読みと筆者の読みの間に見られる大きな違いが、どうして発生しているのかについて二三の例をあげて解説し、合わせて解説のために利用されたロシア側の古い写真 (Maue 博士からその古い写真の画像の一部を提供して頂いた)、拓本、新写真の簡単な比較を行う。それに続いて、ソグド語版の内容と、そこから回収される歴史について、可汗名と可汗位の継承、葬儀、未解決の問題という観点から、銘文を引用しつつ解説する。おおむね PIAC での発表内容そのものである。第 2 部はテキストと日本語訳に続いて、やや詳しい読み注を添えた。訳注に当たるものは大半が第 1 部で触れられているので、ここでは訳注を独立させず、読み注の中に含めることにした。また文字の読みについての解説が第 1 部にある場合は、それも省略した。

第 1 部

1 Livšic の読みと筆者の読みの比較

上でも述べたように、筆者の銘文の読みは、筆者を含む森安教授の調査チームのメンバーが 1997 年 8 月 27 日に作成した拓本に基づいている。2018 年 7 月になって、Maue 教授のチームが撮影した新写真の提供をうけ、拓本に基づき筆者が 1999 年に発表した読みと比較し、その一部を改善した。Livšic の読みは Kljaštorny が撮影した写真 (以下では旧写真と呼ぶ) に基づいていた。⁵squeeze moulding も作成したようだが、それがどれほど利用されたのか明らかではない (Kljaštorny / Livšic 1972: 70)。Livšic が提出したテキストから判断すると、あまり利用価値がなかったのかもしれない。以

⁵ Livšic は 1970 年に現地で碑文を見ている。筆者も現地で碑文を見たが、晴れた日の日中の自然光の中で、草書化したソグド文字の彫りの浅い刻文を読むのは至難の業である。

下でも述べるように、旧写真に基づく Livšic の読みと拓本に基づく筆者の読みを比べて見ると、拓本を作成することがどれほど有効であるかがわかる。新写真は拓本に匹敵し、さらに拓本では区別できない碑文面の偶然の欠損と本来の刻字とを区別できるので、拓本に比べて優れている点がある。しかしその一方で、表面の痛みが軽微な場合には、新写真では文字の凹凸を確認しにくく、拓本のほうが優れているような印象を持った。むろんテクノロジーを駆使して表面の「ノイズ」を除去すれば、このような部分でも新写真の方が優れているのかもしれない。ただ筆者の能力の範囲を超えている。要するに、筆者が新写真も参考にしてここで新たに提出するテキストは、1999年に提出したものと大きく変わらない。

筆者の読みと Livšic の読みが最も異なる部分の一つは、冒頭の第1行 (B1/L, つまり B1 面の第1行) であろう。この部分は比較的に保存状態が良い部分である。これを例にして両者の読みを比較し検討してみよう。

K/L: (‘mwh?)[. . .](pt)s’kh ‘wst’t δ’r’nt tr’wkt c(yn)st’n kw(t)s)’tt ‘γšywn’k⁶

“This . . . stele was erected by the Turks (under) Kwts’tt the ruler of China.”

YY: (r)ty (mwn’)k nwm (sn)k’ ‘wst’t δ’r’nt tr’wkt (‘)šy-n’s kwtr(‘)’tt ‘xšy-wn’k

「この法の石を突厥の阿史那氏の王たちが設置した。」

冒頭の破損が著しい部分を除けば、両者の違いが最も著しいのは、pts’kh と nwm snk’ 及び cynst’n と “šy-n’s であり、この二語の読みは銘文全体の理解にも大きな影響を与える。以下に旧写真、拓本、新写真の画像を示す。(図 1a, b, c)

旧写真



図 1a

拓本



図 1b

⁶ この論文が発表された当時は、ソグド文字の x と γ を区別して転写する習慣がなかった。筆者のテキストでは区別しているので、その点での両者の違いは問題にならない。

新写真



図 1c

確かに *nwm* の *-w-* はやや特異で語中の文字 *-c-* のように見えるのだが、全体として *nwm* と読むことに問題はない。Livšic はこの部分を *pt* と読もうとするわけだが、全く不可能である。彼は、「碑文」を表す語としてカラバルガスン碑文で知られている *pts'k* という語をここに想定して、実際の字画を無視してこの語を読み取ろうとしたに過ぎない。*snk'* の最後の文字は破損しているので、*-h* と *-'* とともに読むことが出来るが、*nwm snk'* は例えば B2/10 に明瞭に読み取ることができるので、*'* の読みが正しい。⁷ ちなみに、その Livšic の読みは *nw(h) snk'* “new samgha” で、この解釈がその後の碑文をめぐる歴史解釈でも大きな影響を与えることになったのは残念であった。また文字 *-h* は、この碑文では *n'βcyh* (B2/4, 5), *n'βcy'kh* (B2/12) に見えるだけだが、その部分は幸い比較的よく保存されていて、B2/10 の *nwm* を Livšic のように *nwh* と読むことは不可能であることが分かる。

Livšic の *cynst'n* では、語頭の文字を *c-* と誤読している。(図 2a, b, c) 確かにこの碑文の語頭の *'* (*alif*) は一見すると *c-* のように見える場合もあるのだが、これが *'* (*alif*) であることは、Livšic 自身が *'wst't* と読む語の語頭の文字と全く同じ形をしていることから首肯出来る。彼がここに *cynst'n* を読むのは、この語がたまたま知られている語であり、筆者の **šyn's* は従来全く知られていない語であるからに過ぎない。これは上の *pts'kh* についても言えることである。テキスト批判に際して *lectio faciliior* を採用するのに似ている。その一方で標準的なソグド文字の字形を考えれば、筆者の *-s* と Livšic の *-n* は余りに共通点がないので、読者は不審に思われるかもしれない。確かにこの語末の *-s* は少し奇妙な形をしているが、それがこの碑文の書き手の書き癖であったらしく、B2/4 の *ms* の *-s* と同じ形をしている。(図 3) この語は突厥の可汗を排出する部族で、漢文史料で阿史那と表記されている名称の原語であることは疑いない。しかもカラバルガスン碑文では、漢文版の「阿史那革命」に対応する部分でこの同じ語

⁷ 「石」を表すソグド語の形式として *snk'* は少し奇妙である。Livšic が梵語の *samgha* 「仏教教団」からの借用語と考える理由はそこにある。しかし *snk'* という形式も知られている。実際 *Vessantara Jātaka* では、この語は 3 例在証されるがその内の 2 例が *snk'* であり、残り 1 例は *snky* である。

が "šn's という表記で現れている (吉田 2011: 14-19). (図 4)



図 2a

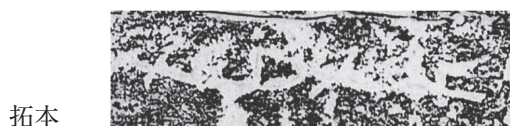


図 2b



図 3



図 2c



図 4

以上見てきたように、Livšic の読みは必ずしも信頼が置けないが、それは彼が依拠した写真がこの種の碑文を読むためには適切ではなかったからである。そして読みづらい部分に、無理をして既知の語を読み取ってしまい深刻な誤解が生じたと言えよう。筆者たちが拓本を採ったのは 1997 年であったが、1956 年に発掘されて以降ずっと屋外に放置してあったことを思えば、発掘後すぐに拓本を採ってあればと残念に思うのは筆者だけではないだろう。

2 可汗の名前

Livšic が他鉢 (佗鉢) 可汗に当たる名前として読み取った $t'sp'r\gamma\gamma'n$ は、 $t'tp'r$ と読むのが正しい。確かに文字 s と t はある程度似ているのだが、この碑文では区別できる。この新しい読みはその後発見された阿史那思摩の墓誌に見られる、他鉢可汗のまた別の漢字音写形である達拔可汗 (中古漢語 $*d'at\ b'wāt/b'uāt$) から支持される (鈴木 2005: 46-48)。⁸ しかも Livšic が B1/2-3, 3, B2/ 4-5, 6, B3/4 において $m\gamma'n\ tykyn$ と読み Mahan Tegin と転写した名前は実在せず、B3/4 を除くすべて $t'tp'r\ x\gamma'n$ と読まなければならない。⁹ さらに Livšic は読んでいないが B2/2 にもこの名前は現れる。Livšic が

⁸ 中古漢語の再構形は Karlgren 1957 に従っている。

⁹ B3/4 では $wm\gamma''\gamma'ry\ m(\gamma)[\]$ と読まれ、 $m\gamma' t'tp'r\ x\gamma'n$ と関係が無い。この部分については下記を参照せよ

my'n tykyn と読む部分はすべてにおいて破損があり読みづらいが、my'n の読みも tykyn の読みも不可能である。しかもトルコ語の tegin 「王子」に対応する語は実際に B2/11 に在証され、そこでは tk'ynt (複数) と表記されている。ちなみに Livšic はこの語を tr'yt と読み “distressed” と翻訳している。しかしその部分の直後に npyšnt 「孫たち」、βrnp'šnt 「曾孫たち」が続くので、¹⁰ 文脈からもこの読みは支持される。

さらに Livšic が my'n と読んだ語は my' ないしは my'' と読まなければならない。my'' は B1/2 に1度しか現れないが、この碑文では語頭だけでなく、語中でも語末でも ' と n はおおむね区別されているので、my'' と読まなければならないことが知られる。この my' は漢字では莫何と表記され、古代トルコ語の称号 bayatur を構成する要素である baya と同じ要素である。6世紀後半の漢字音では、莫何によって baya を表記することがあり得ないことについては Yoshida (1999: 9-11) を参照せよ。無論 my' はトルコ語本来の要素ではなく、鮮卑や柔然など北方の遊牧民の言語の要素だったと考えられる。突厥の可汗がこの称号を帯びることがあったことは、第6代可汗の称号である伊利俱盧莫何始波羅から知られる。いずれにしても、Kljaštorny が、ブグト碑文が捧げられたと推測した突厥の王族の Mahan Tegin は実在しない。

次に問題になるのは、Livšic が B2/8 で βγβwmyn γ'γ'n と読み、βγγ βwmyn の誤記とした上で、突厥碑文に bumīn として記録されている土門可汗に比定した可汗の名前である。この名前は実際には my' wmn' x'γ'n と読まれる。確かに my' は myy のようにも見えるが、βγγ と読むことはできない。先に見た my' という称号をいくらか書き損じていると考えるのが妥当である。¹¹wmn' の読みはほぼ確実である。(図 5a, b, c)

旧写真

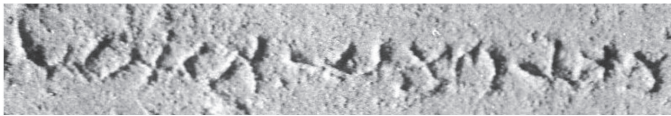


図 5a

拓本

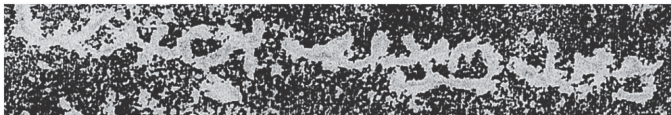


図 5b

¹⁰ βrnp'šnt と読むべきかもしれない。初出の語だが npyšn 「孫」から接頭辞 βr- (< Old Iranian *fra) によって派生した語に違いない。バクトリア語のラバタク碑文に froniago 「曾祖父」という語が見えるが、同じ接頭辞によって派生している。

¹¹ もしかしたら βγγ と my' の書記上の混交かもしれない。

新写真



図 5c

これは他鉢可汗の息子で、死後可汗位を継承した菴羅可汗の菴羅（中古漢語 *ām lâ）と比較できるであろう。漢字音写は、原語の *Umna が異化によって *Umla とも発音されていたことを示している。¹²Kljaštorny と Livšic は, rty nwkr βγβwmyn x'γ'n p'δy (s'r) [...] (δ'rt kt)[] と読んで “And then he addressed the abode of the lord Bumīn-qaghan” と訳し、祖先である土門可汗の魂に呼びかける場面を推定した。しかしこの箇所は、正しくは rty nwkr mγ' wmn' x'γ'n w'δy nšyδ(t)[w]/ δ['](rnt) 「さて彼らは莫何 Umna 可汗を王座に据えた」と読まれ、第4代他鉢可汗亡き後、菴羅が可汗に据えられたことを記録している。今回新写真によって吉田 1999 の p'δy-š'δ'(t)[w]/ δ['](rnt) を w'δy nšyδ(t)[w]/ δ['](rnt) に改善出来たことは幸いであった。

ちなみに、祖先の霊を呼び出すシャーマニズムの降霊の儀式的存在をこの碑文に読み取ることができるとする根拠になっているのは、B2/1 の k'w βγγ s'r pwrsty と B2/7 の k'w βγγšt s'r pwrst であり、Livšic は「神（々）に尋ねる」と訳している。しかし pwrst(y) は 'prs-「尋ねる」の現在形としては奇妙である。また碑文に見られる動詞は、これ以外は過去形（preterite）になっている。従って、pwrst(y) は (')pw'rt/(')pw(')st 「振り返る、帰る」の3人称単数過去形であり、「神々の方へ帰る」は「死ぬ」ことを意味する婉曲表現であったと考えられる。この婉曲表現は、昭蘇碑文にも見えており、k'w βγw s'r p'w'rtnt 「彼らは神々の方へ帰った」とある（Yoshida 2005: 65-66）。こちらは未完了形になっていることは注目される。「死ぬ」を意味するソグド語の他の婉曲表現についても Yoshida 2005 を参照せよ。重要なのは、この表現がソグド語に固有の表現であるということで、この表現を元に安易に突厥人の宗教観を推測することは誠めておきたい。

なおブグト碑文には「死ぬ」を意味する語に、別に pr'yt (B2/3) がある。この語はソグド語文献ではここにしか現れないが、文脈から判断して Livšic の解釈と語源（Old Iranian < *fra + ita-, cf. Skt. preta- “dead”）は正しいと考える。筆者は該当する部分を

¹² 無論 *Omna/Omla と発音を復元することもできるであろう。

tw' xwy-štr 'HY mwX'n x'γ'n pr'y-t rty n'-[wyt 'krty] 「あなたの年上の兄弟のムカン可汗は身罷り、見えなくなりました」(B2/3-4) と読んだ。n'-[wyt 'krty] は、筆者の推補であるが、文脈と良く合う。

無論 Kljaštorny/Livšic が mwγ'n γ'γ'n (= mwX'n x'γ'n) と読み、それを木杆可汗に比定することや、t'sp'r γ'γ'n (実際には t'tp'r x'γ'n) を他鉢可汗に比定し、ブグト碑文を突厥第一可汗国時代の碑文とすることは鉄案であり、上限を 572 年下限を 580 年代とするおおよその年代比定も受け入れることができる。ただし彼らが第 6 代可汗沙鉢略に比定する nw'r x'γ'n に関しては下記を参照せよ。

3 可汗位の継承記事

漢文資料によれば、初代の土門可汗の死後(553)、息子の科羅が位を継ぎ乙息記可汗になったが、彼はその年に病死した。そのとき可汗位を継承するのは息子か弟かに関する議論があったが、結局弟が継承し木杆可汗(553-572)となった。木杆可汗が死んだときも同様で、可汗位を継承するのは息子か弟かに関する議論があったが、結局この時も弟が継承し他鉢可汗となった。他鉢可汗が死んだときには、木杆可汗の息子の大羅便が継承すべきか、他鉢可汗の息子の菴羅が継承すべきかで議論があったが、結局木杆可汗の息子である大羅便の母親が賤しい生まれであるという理由で、他鉢可汗の息子が継承した。それが菴羅可汗で、即位は 581 年であると考えられている。ただ菴羅可汗は大羅便の苦情に堪えきれず、すぐに可汗位を乙息記可汗の息子の摂図に譲り自分は第二可汗になった。摂図は 581 年に沙鉢略可汗として即位した。¹³

このような事情が碑文にどのように反映されているか見てみよう。まず木杆可汗と他鉢可汗の関係であるが、二人が共同統治していたことを示す文言が冒頭に見える：'HRZY nwkr ZK βγy mwX'n x'γ'n 'PZY βγy mγ' t't(p)[r]/ x'γ'n (c)[nn x](wr)-sn(y) k'w xwr-tx(y)z pr(m) prw 'nyt'k βc'npδ 'xwšwy-n'tt wm't[nt] 「さて神のごときムカン可汗と神のごとき莫何タトバル可汗は東[から]西まで全世界において支配者であった」

¹³ ここに仮に記した可汗位の継承年代は、漢文資料をもとに研究者が提出し一般に受け入れられているものである。下でも見るようにブグト碑文や昭蘇の石人銘文に照らせば、実情は少し異なっていたらしい。

(B1/3-4). 平田 (2004: 166-170) は、漢文史料に木杆可汗の時代、その弟で地頭可汗阿史那庫頭というものが東面可汗であったという記事と、地頭可汗がこれ以降記録から見えなくなる事などを根拠にして、他鉢可汗は木杆可汗を継承する以前はこの東面可汗であったと推定しているが、この碑文の記事はその推定を裏付けるように思われる。

その他鉢可汗は木杆可汗の死後は唯一の可汗として君臨したようだ。その年はウサギの年、すなわち 571 年であつたらしい: *rtý xr-(γw)šk srδý (xwt')w 'krty* 「ウサギの年に王になった」 (B2/6)。これに先行する部分を見れば、他鉢の継承は臣下たちからの勧めに従ったということになっている: *tw() xwyštr 'HY mwǵ'n x'γ'n ... / ... [β](t)kšpw (xšy-)t δ'(r)[t ZY n'β](cy)h šy-r'k p'rtw δ'rt rty ms 'kδry tγw βγy mγ/ t('tp'r) x['γ'n] ... (β)tkšpw 'nywny-δ xšy- ZY n'βcy-h p'r* 「あなたの兄である木杆可汗は七洲 (= 全世界) を支配し人民を良く養いました。今あなた莫何タトパル可汗も七洲をそのように支配し人民を養え」 (B2/3-5)。¹⁴ この記事は、木杆可汗の息子の大羅便ではなく、弟の他鉢可汗が継承した事を正当化する文言であつたに違いない。

他鉢可汗は 10 年間支配して病死した。ソグド語版には次のようにある: *(rtý) 10s srδ xšy-()t δ'rt* 「10 年支配 [した]」 (B2/7)。¹⁵ 『隋書』(標点本 1865 頁) によれば、木杆可汗は 20 年、他鉢可汗は 10 年支配して死んだとしている (木杆在位二十年、卒…他鉢…在位十年、病且卒)。可汗の支配年や死亡年はこの種の漢文史料をもとに研究者が推定したものだが、他鉢可汗の即位年は、ブグト碑文の記事と 1 年のずれがある。また昭蘇の石人銘文では木杆可汗は 21 年間領土を支配した (*rtý 21 srδ xš'wnh δ'r*) とあり、これも漢文史料と一致しない。¹⁶ このような不一致が何に起因しているのか明らかではないが、可汗の死や継承の知らせが中国に届くタイミングと、『周書』(標点本 910 頁) が伝えるような実際の死と遺骨の埋葬との間の半年の時間なども原因であつたのかも知れない。

¹⁴ 'βtkšpw 「七洲 = 全世界」の意味については吉田 (2011: 2-5) 参照。

¹⁵ 吉田 1999 は 11 *srδ* 「11 年」と読んでいたが、数字「10」の直後のストロークは数字の「1」ではなく、文字 *s* と読んで数字「10」に添えられた送り仮名として読むのが適切であると判断して読みを変えた。数字の「10」に送り仮名の *s* を添える例は別に知られている。

¹⁶ これを参考にテキストの B2/4 の破損部に 21 *srδ* を補った。漢文史料で木杆可汗は 20 年間支配したとあるのは概数なのだろう (Kljastorny / Livšic 1972: 75)。

他鉢可汗の死後、息子の菴羅が即位したが、他鉢可汗の場合と同様、臣下たちが彼を可汗の位に就けたとしている：rty py-štrw š'dp-y-t trx(w)[nt]/ xwry(')pcy-(nt) ... rty nwkr my' wmn' x'γ'n w'dy nšyδ(t)[w]/δ['](rnt)「その後シャダピットたち、タルクワンたちクルガブチンたち¹⁷ [...] そして今や莫何ウムナ可汗を王座に据えた。」(B2/7-9)。この場合も、後継者が大羅便ではなかったことを正当化する意図があったのであろう。漢文史料によれば、大羅便の母が賤しい生まれの女であることが理由であったと言うが、西突厥の泥利可汗を記念する昭蘇の石人の銘文は、保存状態が悪く難解で一部しか読み取れないものの、x'ttwnh「可敦」という語が何度か現れている。¹⁸ ブグト碑文には見えない語である。石人の銘文にそれがあるのは、母親の血筋を弁護することと関係があるのかもしれない。一般には泥利可汗は、大羅便の孫と考えられている。菴羅の方は父の為に巨大な法の石を設置する命令を発したと記されている：pr(m'tw) δ'r-t (MN) 'BY my' t'p'r x'γ'n wsn .../...(r)[t](y) m(s) prm(')tw δ'r(t) RBkw nwm snk' wst「(菴羅は)父の莫何タトバル可汗の為に命令した...そしてまた巨大な法の石を設置するように命じた」(B2/9-10)¹⁹

『隋書』(標点本 1865 頁)では菴羅は大羅便からの執拗な苦情に堪えきれず摂図に位を譲り、自分は第二可汗になったと記録されている(因以國讓攝圖...菴羅降居獨洛水、稱第二可汗。)。可汗の位を継承した摂図は伊利俱盧莫何始波羅と名乗ったという。さて、碑文の後半部にはδw' xšywn'k「二人の支配者」(B2/15)とδw' x('γ'n)「二人の可汗」(B2/19)という表現が見える。この部分は大きく破損し文脈を追うことは難しいが、菴羅が可汗の位を譲ったことを暗に示していると見なすことができよう。従ってこの碑文の年代の上限は菴羅が可汗の位を譲った 581 年ということになる。そして他鉢可汗の葬儀以降の事は記していないように見えるので、581 年乃至その翌年に碑文は建てられたのであろう。

¹⁷ なおここに見える臣下の称号 xwry'pcyn = 窟合真については吉田 (2011: 6-7) を参照せよ。

¹⁸ この銘文に関してはとりあえず吉田 (2011: 2-5) を参照せよ。

¹⁹ 'wst は動詞 prm'y/prm't「命令する」に支配された不定詞である。この不定詞形は B2/15 にも現れている。これを過去不定詞 'wst't の簡略表記と見なすべきか、現在語幹 'wst'y ~ 'wst にゼロ語尾を添えた現在不定詞とみなすべきか判断に迷うところであるが、この動詞の活用形 'wst't δ'rint B1/1 を参考にすれば、現在不定詞と見なすほうが良いように思う。

4 葬儀の記事 (?)

B2 面の 11 行目以降には他鉢可汗の葬儀の様子が記されているように見える。この部分は破損が甚大で文脈を追うことは非常に難しいが、王子、孫、ひ孫、その他の家来、一族が、嘆き悲しんだという文 (βγy mγ' t(t)p'r x'γ'n tk'y-nt 'cw npyšnt cw βrnp's(nt)[...](cw)[š'δ](pyt) cw xwr-(γ'pcy-)nt cw (Z)Y wkwrt cw n'βcy-'kh '(st)['nt? ...]w β'r-'k 'sp'δy'-(n) pr'y(w) 'βt my-δ 'xšt δ'r-nt「神のような莫何タトバル可汗の王子たち[であれ]、孫たちであれ、ひ孫たちであれ [.....] シャダピットたちであれ、クルガプチンたちであれ、親族であれ人民であれ (誰がいようと) [.....] 騎馬兵とともに七日間嘆き悲しんだ」(B2/11-13) は、漢文史料 (『周書』標点本 910 頁) の記事を彷彿とさせる:「死者、停屍於帳, 子孫及諸親屬男女, 各殺羊馬, 陳於帳前, 祭之。繞帳走馬七匝, 一詣帳門, 以刀劈面, 且哭, 血淚俱流, 如此者七度, 乃止。」ソグド文の 'βt myδ「七日 = 一週間」が、漢文の「七匝」や「七度」と関係があるのかどうかは分からない。²⁰

B2/14 には目的語の部分は破損して見えないが, ptxwstw δ'rnt「彼らは殺した」という表現が見える。葬儀の時に殺されたという「羊馬」等の家畜が目的語になっているのかもしれない。

B2/19 以降 B3/1-4 は文字の大きさがそれ以前と比べて小さくなり書体も異なる。内容面でもそれ以前と異なっているのかも知れないが良く分からない。目立つのは 2 度現れる šyr'k γr'm'k krtk "βrynt「良い財産の蓄積 (?) を祝福する」という表現である。²¹ ここの krtk とおそらく同じ語の krt'k はカラバルガスン碑文にも現れるが、そこでも意味はよく分からない。仮に「蓄積」と訳したが文脈以外に根拠はない。この部分で注目すべきは、ほぼ確実に np'xšt nwm snk' wmy" 'yry mγ' と読める最終行 (B3/4) である。これだけならば、「(この) 法の石は wmy" 'yry mγ' 某によって書かれた」と訳せそうだが、np'xšt の前の語は βγ- で始まっているように見え、筆者自身は仮に βγ'nyk と補ってみた。それが正しければ βγ'nyk np'xšt-nwm snk'「神聖な法が書かれた石」のように訳される。それに続く wmy" 'yry mγ'[] は人名を表していたに違いない。その場合 'yry

²⁰ 'xšt δ'rnt の 'xšt は初出だが, xšywn, 'xš'ywn「悲嘆」に対応する動詞形 *(C)xšy-「悲しむ」の過去形と考えた。

²¹ Kljaštorny / Livšic (1972: 78-79) は、筆者が γr'm'k と読む語を šyr'k と読み, šyr'k krtk を "favours" と訳している。彼らは、可汗が仏教を庇護したことを表す記事の一部と見なしている。

は摂図の可汗としての称号の「伊利俱盧莫何始波羅」に現れる伊利と関連づけられるかもしれない。²²

5 解釈が難しい部分

全体を通じてこの碑文の解釈は容易ではないが、文字の保存状態が悪くないにも拘わらず、解釈出来ない部分がある。B1 面は碑文の上部まで比較的によく残されていて、碑文面の破損も相対的に少ない。その2行目から3行目にかけてはとりわけ難解である：Y-(K) [ZKn] (mz'yx) m(wx)'n x'y'n y'rwkc 'HY n(w)-'r x'y'n 'wr-kwp-'r cr-'cw my" t'[t](p)[r] (x'y'n) wsn wy'(βr)t 「[偉大な] ムカン可汗の y'rwkc の兄弟（である）nw"r 可汗が、'wrkwp'r cr"cw 莫何タトパル可汗の為に話したとき」。Livšic は mwx'n x'y'n を読み取らず、y'rwkc を twrkc、'HY を βyy、'wrkwp'r を 'wskwp'r、cr"cw を ckn'cw と読んでいる。²³ 後続する部分は、上で見た木杆可汗と他鉢可汗の共同統治を述べた件である。まず Livšic は明瞭に読み取れる mwx'n x'y'n を何故か読むことができなかった。ただし先行する [ZKn] (mz'yx) は筆者の推補で全く確実ではない。²⁴

y'rwkc では語頭の y (或いは n-) と後続する ' を一つの文字と見て t- と読んでいるが、この読みは不可能である。²⁵ また 'HY「兄弟」の ' を β- と読んで全体を βyy と読むのも、安易に読みやすい語を読む類いで全く支持でないきない。これに続く部分を 'wskwp'r ckn'cw my'n tykyn prw x'y'n wy'k w'st と読んで “since Mahan tegin ascended the place of qaghan” と訳している。'wskwp'r も ckn'cw も読みやすい語を読み取ろうとしている

²² Kljaštorny / Livšic (1972: 77) は筆者が np'xšt nwm snk' wmy" 'yry と読む部分の後半部を、(p)wk' tryw'n 'YK と読み、Buqa-tarqan は碑文の起草者ではなかったかとしている。これほど両者の読みが異なれば、読者は困惑するであろう。新写真の画像を提示しておこう。(図6) この部分では新写真は非常によく文字が読み取れる。ちなみに吉田1999でも nwm snk' や 'yry は読んでいた。



図6

²³ B1/3の最後の語の my" を my'n と読んでいることは上で述べた。

²⁴ なお wsn は通常前置詞だが、まれに 'ky wsn「誰の為に」(Vessanta Jātaka 1088), tw' wsn「お前の為に」(Pelliot sogdien 2, 757) のように後置詞の用法もある。実際上でも見たように B2/9 には (MN) 'BY my' t'tpr x'y'n wsn「父である莫何タトパル可汗のために」という表現が見られた。

²⁵ 吉田1999では y'rwk' と読んでいた。末尾の文字の読みは Livšic が正しく、-c と読むべきである。筆者の以前の読みを撤回する。

だけで、やはり支持できない。同様に拓本の写真を見れば明らかだが wy'k「場所」、w'st「存在した」と読むことはきわめて難しい。(図7) この碑文では w'st のような未完了形は使われていない事にも注意されたい。wsn はほぼ明らかである。それに続く語は wy'(●●)t と読めるが、破損した2文字は、上下に突き出た字画のない文字である以外には決め手がない。吉田 1999 は wy'(r)[nt] と読んで意味不明の語としているが、語の読みは wy'(rn)t の誤植であった。今回は wy'(βr)t「話す」の過去形を読んできたが、確信はない。



図7

nw'r x'γ'n の読みはほぼ確実である。しかしこの時期に nw'r という名前の可汗は知られていない。Kljaštorny/ Livšic (1972: 74, n. 8) は摂図が帯びた名前の一つの爾伏(中古漢語 *ńzię b'jūk)に着目して、これを S. E. Jaxontov の示唆に従って、爾拔(中古漢語 *ńzię b'wāt/b'uât)の誤写と考え、それが nw'r に対応していると提案した。これは巧妙な考え方であるが、Livšic が βγγ と読み誤った語は確実に 'HY「兄弟」と読めるのであるから、木杆可汗の兄弟であった可能性が高い。そうだとすれば彼らの兄である乙息記可汗が直ぐに思い浮かぶ。彼が死に際して、彼亡き後の共同統治を遺言したと見るのである。彼の別名としては科羅(中古漢語 *k'uâ lâ)が知られている。nw'r と科羅の発音は部分的に似てはいるが、同じ名前の音写とは考えられないだろう。ただこれらの可汗たちは多種多様の別名を持っていたように見えるので、乙息記可汗には nw'r という別名があったのかもしれない。無論これは根拠のない単なる思いつきではある。y'rwkc という、一見すると -c で終わる形容詞も全く不明である。sm'rknôc「サマルカンドの」のように、接尾辞 -c はしばしば地名から形容詞を派生するので、y'rwk という地名があったのかもしれない。あるいは異母兄弟のような兄弟の種類を表す形容詞だったのかもしれない。この語も不明である。

破損はあるが 'wr-kwp-r cr-cw mγ' t[t](p)[r] (x'γ'n) の読みはほぼ確実である。最初の二語も意味不明である。上でも述べたように当時の可汗には多くの別名があったので、現在のところは他鉢可汗の別名であると見なしている。平田(2004)は、他鉢は即位前には東面可汗の地頭可汗阿史那庫頭であったと考えている。筆者も有力な仮説

と考える。その場合には「地頭」や「庫頭」は別名の類いであった可能性がある。しかし 'wr-kwp-r cr"-cw との類似性は全く存在しない。その一方で cr"cw の cr" の部分は第 12 代可汗の処羅可汗や摂図の弟で莫何可汗になった処羅侯の「処羅」(中古漢語 *tś'iwo lâ) の部分と類似しているので、確かにこのような名前が存在したのかもしれない。しかしそれにしても思いつき程度の根拠のない推測である。

6 おわりに

多くの不明部分は残っているものの、ブグト碑文のソグド語面の主要なメッセージはほぼ明らかになったと思う。それは木杆可汗から他鉢可汗への可汗位の継承と、他鉢可汗から菴羅への可汗位の継承の正当性を主張することであった。どちらの場合も木杆可汗の息子の太羅便が強力な対立候補であった。実際この事件がきっかけで突厥は東西に分裂したのであった。その意味で菴羅は他鉢可汗の葬儀を正しく盛大に挙行し、「法の石」を設置したことを高らかに宣言しているように見える。菴羅から可汗の位を受け継いだ乙息記可汗の息子の摂図も、「二人の可汗」の一人として碑文には言及されていると考えられる。つまり、この後東突厥の可汗位継承の本流となった一派の正当性を主張するための碑文であったと考えられる。興味深いことにそのほぼ 20 年後に建てられた昭蘇の石人銘文は、西突厥の泥利可汗が正当可汗であることを主張する為のメッセージであったと考えられる。しかし、泥利の後継者である処羅可汗が唐に亡命してからは、統葉護可汗のような、土門可汗の弟であったイステミの系統の可汗たちが西突厥の可汗となって、実質的な意味での西突厥が成立する。しかしその頃には東突厥は滅亡し、西突厥も阿史那賀魯を最後にまもなく滅亡する。

ソグド面の裏のブラーフミー文字面が、梵語仏典ではなく、おそらくは柔然の言語で書かれていることが判明した以上、筆者が当初考えていた、「法の石」とは、梵語で仏教教理を記したブグト碑文のことであるという単純な解釈は成り立たなくなった。²⁶ 「法の石」がブグト碑文そのものであるなら、その「法」は何か別のメッセージであったことになるであろう。これはブラーフミー面の解読と関わる問題で、筆者の守備範

²⁶ 他鉢可汗の仏教信仰についてはいくつか研究があるが、とりあえず Bazin (1974, 1988) 及び護 (1976: 217-220) を参照せよ。

囲を超える。本碑文と他鉢可汗の仏教信仰との関連の有無も含めて、今後の研究の推移を見守っていききたい。この碑文に関連して残された研究はまだある。十分に読み取れない部分の研究もさることながら、昭蘇の石人銘文の研究は喫緊の課題である。また突厥第一可汗国時代の可汗の名称や、称号の言語学的帰属の問題も最近問題にされている Para-Mongolic との関連で深く考察しなければならないだろう。

第2部 テキスト，翻訳，読み注

(A) テキスト

B-1

- 1 (r)ty (mwn')k nwm (sn)k' 'wst't δ'r-'nt tr-'wkt '(')šy-n's kwtr(')'tt 'xšy-wn'k[]
- 2 'Y-(K) [ZKn] (mz'yx) m(wx)'n x'γ'n y'rwkc 'HY n(w)-''r x'γ'n 'wr-kwp-'r cr-'cw mγ''
- 3 t'(tp)'r (x'γ'n) wsn wy'(βr)t 'HRZY nwkr ZK βγy mwx'n x'γ'n 'PZY βγy mγ' t't(p)[]'r]
- 4 x'γ'n (c)[nn x](wr)-sn(y) k'w xwr-tx(y)z pr(m) prw 'nyt'k 'βc'npδ 'xwšwy-n'tt wm't[]'nt]
- 5 (rty)[(t) 'H(RZY) nwkr cyw'nt py-štrw βγy (m)[wx'n x'γ'n]

B-2

- 1 [(rt)y pr (m)[yw? srδ βγy mwx'n x'γ'n pr'yt Z]Y k'w βγy s'r pwr-sty rty nw(k)r k'w (•)[]
- 2 [(..... cr-'')(c)w mγ' t'(t)[p'r x'γ'n tk'yn]t š'δp-y-t tr-xw-'nt xwr-γ'p-cy-nt tw-δwnt (s't)[]
- 3 [ZKn βγy mγ' t'tp'r](x'γ'n w'n)kw pt[škw'](tw δ)[]'rnt 'PZ]Y tw(') xwy-štr 'HY mwx'n x'γ'n pr'y-t rty n'-[]
- 4 [wy't 'krty 'HRZY 21? srδ 'β](t)kšpw (xšy-)'t δ'(r)[t ZY n'β](cy)h šy-r'k p'rtw δ'rt rty ms 'kδry tγw βγy mγ'
- 5 t'(tp'r) x[γ'n w'](δ)[y nyδ r]ty [(•) ('β)tkšpw 'nywncy-δ xšy-' ZY n'βcy-h p'r rty nw[kr]
- 6 β(γ)y m(γ)' [t]'t(p'r x'γ'n ms ••)[ptš](k)w'n ptywšt w δ'rt rty xr-(γw)šk srδy (xwt')w (')k(rt)[y]

- 7 (rty) 10s srδ xšy-(')[t δ'rt rty? βγy] (mγ'?) [t'tp'r x']γ'n k'w (βγ)y-št s'r pwrst rty py-štrw
š'δp-y-t trx(w)['nt]
- 8 xwrγ(')pcy-(nt) s[]t (.....)[](''βr)-'δtw δ'rnt rty nwkr mγ' wmn' x'γ'n w'δy nšyδ(t)[w]
- 9 δ['](rnt r)t[y](k...)[βγy mγ' wmn'](x')γ'n pr(m'tw) δ'r-t (MN) 'BY mγ' t'tp'r x'γ'n wsn
RB(k')
- 10 [](...)[](')krt y (r)[t](y) m(s) prm'(')tw δ'r(t) RBkw nwm snk' 'wst rty 'YK
nw(m)
- 11 [snk' 'HRZY](pts)['r? cw ZKn 'wrkw](p'r) βγy mγ' t'(t)p'r x'γ'n tk'y-nt 'cw
npyšnt cw βrnp's(nt)
- 12 [](cw)[š'δ](pyt) cw xwr-(γ'pcy-)nt cw (ms) wkwt cw n'βcy-'kh '(st)['nt?]
- 13 [](•) β'r-'k 'sp'δy-'(n) pr'y(w) 'βt my-δ 'xšt δ'r-'nt
- 14 [](t) (ptxw)stw δ'r-'nt rty cy-m'nt pyštr(w ms?) BLANK
- 15 []nwm s](nk' pr)m'tw δ'r-(nt) '(ws)t rty c'n'w δw' xšywnk
- 16 [](t)[](r'')tw δ'r-(nt rty) 'sky-s'r r['](δy) m'tnt rty
- 17 [](xwt)y 'yt δ'r-nt rty (wr's yw)yδ'n s(p')δ m(zyx?)
- 18 [](•)' n(sm)y ZY ['n]y wys(pw) 'ytδ'r-(nt) r[ty]
- 19 []'k δw' x('γ'n) šy(r'w) m(r)[]
- B-3
- 1 []šyr')(k) γr-'m'k krtk [''β](r)y-(n)t rt[y]
- 2 []pry]myδ srδ šyr'k γr'mk krtk ''βry-n[t]
- 3 [].....t 'PZY (.... n'βcyh?) mrtx(m')k 'št't 'HRZ-Yβγ m(.)[]
- 4 [](• mr)δ βγ('nyk) np'xšt-n(w)m (snk') wmy'' 'y-ry mγ(')[]
- 5 [] BLANK

(B) 翻訳

この法の石を突厥の阿史那氏の王たちが設置した。^(B12) [偉大な] ムカン可汗
の y'rwkc の兄弟（である）nw'r 可汗が, 'wrkw p'r cr'cw 莫何タトパル可汗の為に話し
たとき, さて（そのとき）神のごときムカン可汗と神のごとき莫何タトパル可汗は東 [か

ら] 西まで全世界において支配者であった。[彼らは七洲を支配し人民を養った(?)。] さてその後、神なる[ムカン可汗は^(B2/1)...した。そして虎の年に(?)ムカン可汗は身罷り]、神のもとへ帰った。

そして[...]に向かって[...] ^(B2/2) [... さて 'wrkwp'r cr''cw 莫何タトバル可汗の王子たち、] シャダピットたち、タルクワンたち、窟合真たち、トドンたちはみんな[神なる莫何タトバル可汗に申し上げた]:「あなたの兄上のムカン可汗は身罷り、[雲隠れされました。21年の間(?)] 七洲を支配し人民を良く養われました。今またあなた様、神なる莫何^(B2/5) タトバル[可汗は王位を継承してください。そして]七洲をちょうどそのように支配し人民を養って下さい。さて神のような莫何タトバル可汗もまた[同意して (ptsynt'tw δ'rt rty?), この願いの] 言葉を聞き入れた。そしてウサギの年に王になった。^(B2/7) そして10年[支配した。そして神のような莫何タトバル可汗は神々のもとへ帰った。

その後シャダピットたち、タルクワンたち窟合真たち[...] たちは相談した(?)。そして今や莫何ウムナ(菴羅)可汗を王座に据えた。[...] 莫何ウムナ(菴羅)可汗は父である莫何タトバル可汗のために命令した、大きな^(B2/10) [寺院／墓(?)]を設置するようにと。寺院／墓が(?)]出来たとき、また命令した、大きな法の石を設置するようにと。そして法の[石を設置したとき、'wrkwp'r (という名前の)] 神のような莫何タトバル可汗の王子たち[であれ]、孫たちであれ、ひ孫たちであれ^(B2/12) [.....] シャダピットたちであれ、クルガブチンたちであれ、親族であれ、人民であれ、誰がいようと[.....] 騎馬兵とともに七日間嘆き悲しんだ。[.....] を彼らは殺した。そしてこの後また^(B2/15) [..... 法の] 石を設置するように彼らは命令した。二人の支配者たちが[...]した]とき、[.....] 彼らは泣いた(?)。そして東方への(／高い方への)道にあった。そして^(B2/17) [.....] 彼らは自ら(?)取った。そして??の軍隊は大きな[.....] 彼らは??と[他の]すべてを取った。

^(B2/19) [.....] 二人の可汗は良い(?) ^(B3/1) [..... すばらしい] 財産の蓄積(?)を祝福する。そして[.....] この(?)年すばらしい財産の蓄積(?)を祝福する[.....] そして人民の(中で)男80(人)[.....]。それから主よ、[.....] ここで、神聖にして法の書かれた石を wmy" 'yry 莫何 [...] は書いた?]

(C) 文字の読み注：冒頭部など第 1 部で詳しく解説した部分は省略した。

B1/1

(r)ty (mwn')k: 筆者が rty mwn'k と読んだ部分は、表面の摩耗が著しく文字の判読は難しい。拓本、旧写真、新写真でも文字らしきものが見えていて、この読みと矛盾しない。Livšic の読みの 'mwh は、どの部分をどう読んだのか分からない。
'xšywn'k の後にはスペースがあるが、期待される複数の語尾 -t は見えない。

B1/2

'Y-(K): 'y- の読みはほぼ確実だが、k 以降の部分は表面の破損が激しい。Livšic は判読不可能だと判断している。Yoshida 1999 では 'Y-(K)' を提案した。語末の ' と見なしたものは新旧の写真では確認できない。この碑文では、この ideogram は 'YK' ではなく 'YK と綴られるようである。

B1/4

x'y'n: 旧写真では確認できないが、拓本や新写真ではほぼ確実である。

(c)[nn]: 吉田 1999 では [MN] を補った。拓本や新写真では c が確認できるように思う。

[x](wr)-sn(y): 文脈からも残画からもこの読みには問題はない。

xwr-tx(y)z: Livšic の読みの 'wrts'r は、語頭の x- を ' と読み誤った事に起因している。文字 t はやや古風な書体で、下部が円を描いておらず文字 y のようにも見える。

'xwšwy-n'tt: Livšic の 'swšwyn'tt との読みの差違はわずかで、2 番目の文字を x と読むか s と読むかの違いである。x と s はある程度似ていて、遅い時期の草書体では区別できないこともある。しかしこの場合旧写真、拓本、新写真のどれをみても x/y の読みが支持される。*xšywn'tt 「支配者たち」を意図したはずのこの奇妙な綴りは、書き損じによるものであろう。

B1/5

(rty): 文字を特定できない残画がわずかに見えるだけであるが、拓本からは、この読みは十分に可能である。'HRZY から始まる次の文ではムカン可汗の死が報告されているのであるから、ここは共同統治の最後の部分であり、(rty 'btkšpw) [xšy't δ'mt 'PZY n'bcy'kh p'rtw δ'm](t) と補うことができるかもしれない。

cyw'nt: 吉田 1999 は c'w'nt と読んでいた。実際旧写真や拓本では、2 番目の文字が y

か'(alif)かの判断は難しい。しかし新写真でははっきりと cyw'nt と読むことができる。

B2/1

(rt)y pr (m)[] : 吉田 1999 では読んでいなかったが、拓本でも新写真でもこの読みはほぼ確実である。干支を記していると推定して「虎の年」を復元した。無論可能性だけなら pr (m)[wš srδ]「鼠の年」も可能である。ここはタトバル可汗がウサギの年（西暦 571 年）に即位したことから判断して、ムカン可汗の死はその前年と考えた。或いは (x)[rywšk srδ] も可能か。

B2/2

[cr''](c)w my' t'(t)[p'r] : 破損が激しい碑文上部では、Livšic は文字を読んでいないが、この部分は旧写真、拓本、新写真でも明瞭に読み取れる。B-1 面の 2 行目に照らして、[cr''](c)w と復元したが、[pr'](y)w「～とともに」も可能かもしれない。

[tk'yn]t : Livšic は ('YK) と補い疑問符を添えている。t の読みは旧写真と拓本に照らしてほぼ確実だと思う。B2/11 を参考にして tk'ynt を補ったが、単なる推測である。

š'δp-y-t : š'δp-w-t のようにも見えるが、B2/7 にもあり、またよく知られた語であるのでこの表記が意図されたことは確実である。

B2/3

n' : Livšic は (...) のように表記して文字を判読していないが、旧写真、拓本、新写真に照らして n' の読みはほぼ確実である。rty n'-/[wyt 'krty]「見えなくなった=雲隠れした」と補った。

B2/4

[β](t)kšpw : Livšic は KSP と読むが、この碑文では s と š は明瞭に区別されているので、不可能である。彼が p の後にあるはっきり読み取れる -w を読みとらない理由はよく分からない。

(xšy-)'t : この読みは確実ではないが、残画と矛盾しない。Livšic の ('n)[β](γ)t もおそらく同じような文字列を見ていたのであると思う。

my' : 碑石の下端まで書かれているので、Livšic の my'[n] は無理である。

B2/5

('β)tkšpw : Livšic の rty 'pw は、筆者が β と読む文字を r に、k を y に、š を ' に読んで

いる。文字šは相対的に小さく書かれており、それと認識するのが難しかったようである。一々の文字の読みは全く受け入れられないわけではないが、'pw は 'nywnyδのような副詞を補語にとることはあり得ないので、全体としては無理な読みだと言わざるを得ない。

xšy-'ZY : Livšicはこの部分を xšywny「王、支配者」と読んでいる。筆者が語末の'と読んだ文字を w に読んでいる。全く不可能である。

B2/6

[ptš](k)w'n : 読みは難しい。Livšic の読みは [s](γ)wn である。-n はほぼ確実である。吉田 1999 は nβyr''k と読んで、nβyr「相談する」の名詞形と考えた。末尾を -k と読むことはできないので、この読みは撤回する。

(xwt')w : Livšic は判読できなかったが、読みはほぼ確実である。

(')k(rt)[y] : Livšic の w'st は文脈から彼が期待する語を読んだだけのものである。ただしこの碑文ではもっぱら過去形 (preterite) を使うので、この未完了形はそもそも期待されない。k や r は文字の下部が破損して読みづらいが、残された字画はこの読みと矛盾しない。

B2/7

(rty) 10s srδ : Livšic の wywšw は、どのようにしてそう読んだのか判然としない。rty はほとんど読めないが、この位置で期待される語である。

[βyy] (mγ'?) [t'tp'r x']γ'n : ここで Livšic とは異なり mγ' を補ったのは、拓本のこの部分に m と読めそうな残画が見えるからである。

B2/8

(")βr)-'δtw δ'rnt : Livšic は wk[wrt pt](s)δtw δ'rnt “the Kinsmen approved” と読む。δtw に先行する部分の読みは難しい。筆者は拓本に基づいてこのように読んでみた。意味は不明である。文脈から「相談した」と訳したが、たいした根拠はない。

B2/9

[(k•••)] : Livšic の rty βγ[y βγwm](yn) の読みはやや強引である。筆者が k と読む部分を r と読み rty の一部と考えているようだ。後に続く m にも見える部分を βγ- と読もうとしているのかもしれない。

(MN) 'BY : Livšic は (k)t 'yβ と読む。筆者の MN も難しい。冒頭の右下に c- のように見える残画がある。中間は表面が破損しているが最後は n のようだ。もしかしたら c'wn あるいは cnn と読むべきなのかもしれない。wsn MN/cnn という複合前置詞が在証されており、それは参考になるだろう。この n の尾を Livšic は t と読もうとしている。彼の kt は prm'tδ'rt [「命令した」] の内容節を導く接続詞が期待されると思ったのであろう。彼は 'yβ に付いては注釈を施さないで、どう理解したのか不明である。ただこの語は明瞭に 'BY「父」と読めるので、'yβ は問題にならない。

B2/10

(')krty (r)[t](y) m(s) : 読みは確実ではないが、不可能ではないように見える。

prm'(')tw : m と t の間の距離がやや大きく、' が二つ書かれているのではないかと考えたが、確信はない。Livšic の prm'tw でも問題はない。

B2/11

'wrkw](p'r) : かろうじて](p'r) が読めるので、B1/2 に従ってこう補ったが、単なる推測に過ぎない。

βγγ : Livšic の rty は拓本と新写真によって容易に排除できる。

my' : 読みは明瞭だが Livšic は βγ' と読む。my' という称号を知らなかったことから来る、単なる誤読である。

tk'ynt : Livšic は tr'yt と読んで distressed と翻訳している。筆者とはほぼ同じ字画を認識しているわけだが、文字の読みが微妙に相違している。筆者の k を r に読むことは字形の類似からかろうじて理解できるが、y と n の連続を γ と読むことなどは、拓本と新写真では全く不可能である。

B2/12

この行では Livšic と筆者の読みに大きな違いはない。吉田 1999 では行末に 'Y-K' と読んでいたのだが、ここでは Livšic の読みに従って、存在動詞 'st の 3 人称複数 injunctive の 'st'nt と読むことにした。ただ文字の破損があり、全く確信が無い。

B2/13

pr'yw : Livšic は wr'yt と読んでいる。p と w、w と t は文字を構成する円形の部分が存在する点で似ている事は事実だが、拓本と新写真では p- は明瞭であり wr'kh の複数

形を読み取することは不可能である。

'βt : この碑文では文字 y と文字 β の区別は明瞭で、'βt を 'yt と読むことは出来ない。ちなみに Livšic は 'yt をアベスタの aēta- と結びつけ「部分 part」と訳している。

'xšt : Livšic が 'nβyt と読むこの部分を、拓本に基づき吉田 1999 は '(xš)t と読んでいた。xš については確信が無かったのだが、新写真によれば 'xšt の読みは確実である。Livšic もほぼ同じ文字列を見ていることになるが、彼は知られている語を読み取ろうとして 'nβyt 「分配する」と読んだ。

吉田 1999 では 'xšt δ'r'n[t] の意味は不明のままにしておいた。ここでは xšywn, 'xš'ywn 「悲嘆」に対応する動詞形 *(')xšy- 「悲しむ」の過去形と考えた。動詞語幹の (')xšy- はまだ在証されたことはないが、preverb の pr- を添えた prxšy 「悲嘆する」は在証されている。'xšt という重語幹の過去語幹は奇妙である。もしかしたら *xšyt の誤刻なのかもしれない。なお xšywn 及び関連する *xšy- に関して GMS § 1084 は Yidgha の xšī を参照している。(Cheung 2007: 452 も参照せよ)。DMSB (38b) が掲げる意味不明の動詞 *xš- がこれと関連するかどうか明らかでは無いが、こちらの 'xš- はその文脈 ('xš'nt γ'r'nt) から γ'r と同様「守護する」を意味するように見える。

B2/14

[](t) : Livšic の sywn は彼がこの後の語を ptywštw δ'r'nt 「彼らは聞いた」と読んだことから補ったもので、旧写真、拓本、新写真のどれにおいてもほぼ完全に破損している。かろうじて語末の長い尾が見えていて、Livšic はそれを -n と解釈したのであろう。無論これは -t の尾でもあり得る。

ptxwstw : この碑文では š と s は区別が容易なので、新写真により Livšic の ptywštw は排除できる。ここでは葬儀に際して犠牲獣を殺したことが問題になっているに違いない。その意味で先行する破損部に複数形の語尾 -t を読んでみた。

cy-m'nt : 吉田 1999 は Livšic に従い cyw'nt と読んでいたが、今回は新写真によって cy-m'nt と読む。拓本でも m の読みは支持されるように見える。

pyštrw の後に m で始まる短い語が見える。my' とは読めないようなので、仮に ms と読んで見た。そのあとは空白である。これに続く語が長めなので、余白を残して 15 行目の冒頭に書くことにしたのであろう。

B2/15

rt_yに先行する部分の読みは表面の破損の為に不確かであるが、確認できる残画、特に新写真で見えるようになった残画と矛盾しない。なおこれは基本的に吉田 1999 と同じ読みである。ただし [s](nk') の読みはほとんど推定である。

r''tw δ'rint : r'y/r't 「泣く」の過去形と考えたが、読みそのものが確実では無い。r'ytw δ'rint も可能かもしれない。

B2/16

'skys'r : Livšic は (. . .) šyr'k と読んでいるが、拓本および新写真によってほぼ確実に 'skys'r と読むことができる。原義は「上方へ」であるが、「東方へ」の意味もある。

rl'[(δ)y : Livšic は βrtpδ と読むが、rt を補うスペースは存在しない。拓本では δy の読みはほぼ確実である。初頭の r- は破損があって読みづらい。吉田 1999 では npδy と読んでいた。古代ペルシア語に nipadi 「後を追って」という副詞があり、それと同じ語源の語だと考えた。同じよう pδ を含む複合語に cpδ' 「全く」がある。初頭の文字は r- と読めるように思うので、今はこの読みを放棄した。遺族たちが葬儀において、泣きながら東方に向かって後を追って行ったことを意味していると考えた。

B2/17

この行は旧写真では文字の判読が難しかったようだ。最後の sp'δ m(...) 以外は、Livšic がどの部分をどう読んでいるのか理解できなかった。拓本や新写真はいくらかましであるが、それでも意味のある語を読み取ることが難しい。吉田 1999 と相当異なる読みをここでは提案したが、全く確信がない。

B2/18

n(sm)y : この読みが正しいなら、動詞 nyš- “to be spoiled” の語根 √ nas- から接尾辞 m- によって派生した名詞ではないだろうか。その場合は「滅び」のような意味になるのであろう。或いは n(šm)y 「西」と読むべきか。

B2/19

x(γ'n) šy(r'w) : Livšic の šyrw(št)w “friends” との違いは大きいですが、拓本でも新写真でも x'γ'n の読みはほぼ確実である。これに続く語の読みと解釈は難しい。

B3/3

(n'βcyh) : Livšic の提案に従っているが、これは残画と矛盾しない。

'št't : Livšic は 'st't と読むが s の読みは難しいと思う。80 人の男子を任命して墓の管理者にしたという意味ではないだろうか？

'HRZY-βγ : Livšic は βγγ と読むが -y は見えない。呼格の βγ が見えていることから、ここは直接引用の箇所であるらしい。

語彙

"βr'δtw-δ'rnt 3.pl.pret. 不明の他動詞 unknown transitive verb B2/*8

"βryn/ vb. tr. 祝福する “to bless”

"βrynt 3.sg.pres. B3/*1, B3/2

"šyn's pr. noun 阿史那 “Ashinas” B1/1

"šyn's-kwtr"tt

"s/yt vb. tr. 取る “to take”

'yt-δ'rnt 3.pl.pret, B2/17, B2/18

'βc'npδ f. 世界 “world” B1/4

'βt-myδ noun 一週，七日間 “week, seven days” B2/13

'βtkšp- m. 七洲，全世界 “the seven divisions (of the world) = entire world”

'βtkšpw acc.sg. B2/*4, B2/*5

'BY m. 父 “father” = 'ptr B2/9

'cw rel. pron. どんな～も “whatever” B2/11

cw B2/11, B2/*12, B2/12(x3)

'HRZY conj. それから（文頭をマークする） “then, and” (linking clauses) = rty

B1/3, B1/*5(x2), B3/3 ('HRZYβγ)

'HY m. 兄弟 “brother” = βr't B1/2, B2/3

'kδry adv. 今，それで “now, then, thereupon” B2/4

βw-/krt- vb. intr. ～になる “to be, to become”

'krty 3.sg.pret. B2/*6, B2/10

'nyt'k adj. 全～，すべての “whole, all” B1/4

- 'nɣwncyδ adv. そんなふうに “in such a way” B2/5
- 'ny- adj. 他の “other”
- 'ny nom.sg.m. (as acc.) B2/*18
- 'PZY conj. そして “and” = 'ty B1/3, B3/3
- 'skys'r adv. 東方へ, 上方へ “eastward, upward” B2/16
- 'sp'δy'n noun 兵士 “soldier” B2/13
- 'št't num. 80 “eighty” B-3/3
- 'wrkwpr'r pr. noun “Urkupar” B1/2
- 'wst/wst't vb. tr. 設置する, 置く “to place, establish, put”
- 'wst pres.inf. B2/10, B2/*15
- 'wst't-δ'r'nt 3.pl.pret. B1/1
- *'xšy/xšt(?) vb. tr. 嘆き悲しむ “to lament over ~”
- 'xšt-δ'r'nt 3.pl.pret. B2/13
- 'xšywn'k m. 支配者 “ruler”
- 'xšywn'k B1/1
- 'xwšwyn'tt pl. B1/4
- xšywnk B2/15
- 'YK conj. ～したとき “when” = c'n'w B1/2, B2/10, B2/12
- 'yry pr. noun 伊利 “Ili” B-3/4
- 'yt-δ'rnt s.v. "s'/yt
- β'r'k m./adj. 騎馬兵／騎馬の “cavalier” B2/13
- βɣ- m. 神, 主人 “god, lord” k'w βɣy/βɣyšt s'r pw'rt 神（々）のもとに返る = 死ぬ “to return to the god(s) = to die”
- βɣ voc. sg. B3/3 (HRZYβɣ)
- βɣy nom.sg.m. B1/3(x2), B1/5, B2/1 (k'w ~), B2/6, B2/11
- βɣyšt pl. B2/7
- βɣ'nyk adj. 神聖な, 神々しい “divine” B3/*4
- βmpyšn noun 曾孫 “great grandson”

βrnp'šnt pl. B-2/11 (for *βrnpyšnt)

c'n'w conj. ～したとき “when” B-2/15

cnn prep. ～から “from” B1/*4

cr'cw pr, noun “Chrachu” B1/2(N)

cw s.v. 'cw

cym'nt prep.+dem. この～から “from this ~” B2/14

cyw'nt prep. + dem. あの～から “from that ~” B1/5

δw' num. 2 “two” B2/15, B2/19

γr'm'k m. 財産 “wealth” B3/1

γr'mk B3/2

k'w prep. ～方へ “toward” B1/4, B2/1(x2), B2/7

krtk m. (不明語) 蓄積? unknown word “accumulation(?)” B3/1, B3/2

-kwtr'k (複合語の後分) ～一族の “of ~ tribe”

"šyn's-kwtr"tt pl. B1/1

m'tnt s.v. x-/(w)m't

mγ' noun (称号) 莫何 “(title) Magha”

mγ' B1/3, B2/2, B2/4, B2/6, B2/8, B2/9, B2/11, B3/*4

mγ" B1/2

MN prep. ～から “from” = cnn B2/*9

mrtxm'k m. 男, 人 “man” B3/3

ms adv. また, ～も “also” B2/4, B2/*6, B2/10, B2/*14

mwn'k demon. この, これ “this” B1/*1

mwx'n pr. noun ムカン “Mukhan” B1/2, B1/3, B1/*5, B2/3

myw noun 虎 “tiger” B2/*1

mz'yx adj. 大きい, 偉大な “big, large, great” B1/2

mzyx B2/*17

n'βcyh f. 民族, 人民 “people, nation” B-2/*4, B2/5 B3/*3

n'βcy'kh B2/12

n'rwkc (or y'rwkc?) 不明語 unknown word B1/2

np'xšt-nwm-snk' noun 法が書かれた石 “stone on which the law is written”

B-3/4

npyšn m. 孫 “grandson”

npyšnt pl. B2/11

nsmy 不明の語 unknown word B2/*18

nšyδ/nšyδt vb. tr. 据える, 設置する “to settle”

nšyδtw-δ'rnt B2/*8-9

nw"r pr. noun ニワール “Niwar” B1/2

nwkr adv. さて, 今 “now, then” B1/3, B1/5, B2/1, B2/*5, B2/8

nwm snk' noun 法の石 ‘a stone of law” B1/1, B2/10, B2/*10-11, B3/*4

p'r/p'rt vb.tr. 養う “to nurture”

p'r 2.sg.impv. B2/5

p'rtw-δ'rt 3.sg.pret. B2/4

/pr'yt vb. intr. 身罷る “to pass away”

pr'yt 3.sg.pret. B2/3

pr'yw postp. ～と一緒に “together with” B2/13

prm postp. ～まで “up to ~” B1/4

prm'y/prm't vb. tr. 命令する “to order”

prm'tw-δ'rt 3.sg.pret. B2/9, B2/10 (prm"tw-δ'rt)

prm'tw-δ'rnt 3.pl.pret. B2/*15

prw prep. ～に／～で “on, in, at” B1/4

prmyδ prep. + dem. この～で “on this ~” B3/*2

ptywš/ptywšt vb.tr. 聞く “to listen to ~, hear”

ptywšt-δ'rt 3.sg.pret. B2/6

ptškw'n noun 申し上げる言葉, 願い “humble essage, request” B2/6

ptškwy-/ptškw't vb.tr. 申し上げる “to say humbly, request”

ptškw'tw-δ'rnt 3.pl.pret. B2/*3

ptxw'y/ptxwst- vb. tr. 殺す “to kill”

ptxwstw-δ'r'nt 3.pl.pret. B2/14

pw'rt/pwrst- vb.intr. ふり向く, 返る “to turn away” k'w βγy/βγyšt pw'rt 神（々）のも

とに返る = 死ぬ “to return to the god(s) = to die”

pwrst 3.sg.pret. B2/7

pwrsty 3.sg.pret. B2/1

pyštrw adv. 後で “later, afterward” B1/5, B2/7, B2/14

r'δ noun 道 “road, way”

r'δy obl. B2/*16

RBk' adj. 大きい “big, large, great” = mz'yx B-2/9

RBkw B2/10

rtý conj. = 'HRZY B1/*1, B2/1, B2/3, B2/4, B2/*5, B2/6, B2/7(x2), B2/8, B2/*9, B2/*10,

B2/10, B2/14, B2/15, B2/16(x2), B2/17, B2/*18, B3/1

s'r postp. ～へ “toward” B2/1, B2/7

snk' s.v. nwm-snk'

sp'δ noun 軍隊 “army” B2/*17

srδ noun 年 “year”

srδ B2/7, B3/2

srδy obl. B2/6

š'δpyt noun (称号) シャダピット “(title) shadapit” B2/2, B2/7,

šyr'k adj./adv. 良い, 良く “good, well” B3/*1, B2/4, B3/2

šyr'w adv. 良く (?) “well” B2/*19

t'tp'r pr. noun タトパル “Tatpar” B1/3(x2), B2/*2, B2/*5, B2/*6, B2/9, B2/11

tyw pers. pron. 2 sg. あなた “you (sg.)” B2/4

tw' obl. B2/3

tk'yn noun (称号) 王子 “(title) prince” (借用語)

tk'ynt pl. B2/*2, B2/11

tr'wk noun/adj. 突厥人 (の) “Turk, Turkic”

- tr'wkt pl. B1/1
- trxw'n noun (称号) タルフワン "(title) Tarkhwan"
- trxw'nt pl. B2/2, B2/*7
- tw' s.v. tɣw
- twδwn noun (称号) トドン "(title) Todon"
- twδwnt pl. B2/2
- w'δ noun 座席, 王座 "seat, throne"
- w'δy obl. B2/8
- wkw'r noun 親族, 縁者 "kinsman"
- wkwrt pl. B2/12
- wm't'nt s.v. x-/(w)m't
- wmɣ" pr. noun ウマガ "Umagha" B3/4
- wmn' pr. noun ウムナ 'Umna" B2/8
- wr's 不明語 unknown word B2/*17
- wsn postp. ~のために "for" B1/3, B2/9
- wy'βr/wy'βrt vb. intr. 話す "to talk"
- wy'βrt 3.sg.pret. B1/*3
- wysp- adj. すべての "all, every"
- wyspw acc.sg.m. B2/18
- x-/(w)m't vb. intr. (存在動詞, 繫辞) "to be"
- 'st'nt 3.pl.inj. B2/*12
- m'tnt 3.pl.pret. B2/16
- wm't'nt 3.pl.pret. B1/*4
- x'γ'n noun (称号) 可汗 "(title) qaghan" B1/ 2(x2), B1/3(x2), B1/4, B-2/3, B2/*5, B2/*7,
B2/8, B2/*9, B2/9, B2/11, B2/19
- xrywšk m. ウサギ "hare" B2/6
- xšy-/xšy't vb. tr. 支配する "to rule"
- xšy-' 2.sg.impv. B2/5

xšy't-δ'rt 3.sg.pret. B2/*4, B2/*7

xšywnk s.v. 'xšywn'k

xwrsn noun 東 “east”

xwrsny obl. B1/*4

xwrtxyz noun 西 “west” B1/4

xwry'pcyn noun (称号) 窟合真 “(title) Khurghapchin”

xwry'pcynt pl. B2/2, B2/8, B2/12

xwt'w noun 王 “king” B2/6

xwty adv. 自ら “self” B2/*17

xwyštr adj. 年上の “elder” B2/3

y'rwkc (or n'rwkc?) 不明語 unknown word B1/2

ywyδ'n 不明語 unknown word B2/17

ZK art. その “the” B1/3

ZY conj. (並列の接続詞) 及び “and” B2/*1, B2/5, B2/18

10s num. 10 “ten” B-2/7

参考文献

欧文

DMSB = Sims-Williams, N., and Durkin-Meisterernst, D., 2012. *Dictionary of Manichaean Sogdian and Bactrian*. (Corpus Fontium Manichaeorum, Subsidia, *Dictionary of Manichaean Texts*, Vol. III: *Texts from Central Asia and China*, Part 2), Turnhout.

L. Bazin, “Turcs et Sogdians: les enseignements de l'inscription de Bugud (Mongolie)”, in: *Mélanges linguistiques offerts à Emile Benveniste*, Paris, 1975, pp. 37-45.

J. Cheung, *Etymological dictionary of the Iranian verb*, Leiden/Boston, 2007.

B. Karlgren, *Grammata Serica Recensa*, Stockholm 1957.

S. G. Kljaštornyj / V. A. Livšic, “Sogdijskaja nadpis' iz Buguta”, in: *Starny i narody Vostoka*, X, Moscow, 1971, pp. 121-146.

S. G. Kljaštornyj and V. A. Livšic, “The Sogdian Inscription of Bugut Revised”, in: *Acta Orientalia Hungaricae* XXVI(2), 1972, pp. 69-102.

S. G. Kljaštornyj / V. A. Livšic, “Bugut'taki Sogtca kitabeye yeni bir bakış”, in: *Yürk Dili Araştırmaları Yıllığı, Bellete* 1987 [1992], pp. 201-241.

D. Maue, A. Vovin, É. de la Vaissière, and M. Ölmez, “The Khüis Tolgoi inscription” (forthcoming in *JA*).

Y. Yoshida, “Further remarks on the Sino-Uighur problem”, in: *Researches in Asian languages* III,

2000, pp. 1-10.

Y. Yoshida, "Sogdian version of the new Xi'an inscription", in: É. de la Vaissière and É. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 2005, pp. 57-72.

和文

鈴木宏節「突厥阿史那思摩系譜考：突厥第一可汗国の可汗系譜と唐代オルドスの突厥集団」87/1, 2005, pp. 37-68.

L. バザン「六－八世紀のチュルク人と仏教」（濱田正美訳）『東方学』78, 1989, pp. 141-154.

平田陽一郎「突厥他鉢可汗の即位と高紹義亡命政権」『東洋学報』86/2, 2004, pp. 151-184.

護雅夫「突厥帝国内部に於けるソグド人の役割に関する一資料—ブグト碑文—」『史学雑誌』81-2, 1972, pp. 77-86.

護雅夫『古代遊牧帝国』東京, 1976.

森安孝夫・オチル（編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』大阪 1999.

森安孝夫・吉田豊「モンゴル国内突厥ウイグル時代遺跡・碑文調査簡報」『内陸アジア言語の研究』XIII, 1998, pp. 129-170.

吉田豊「ソグド人とトルコ人の接触に関するソグド語資料2件」『西南アジア研究』67, 2007, pp. 48-56.

吉田豊「ソグド人と古代チュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50, 2011, pp. 1-42.

吉田豊・森安孝夫「ブグト碑文」（＝吉田 1999）森安・オチル（編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』大阪 1999, pp. 122-125.

〔補記〕

碑文の拓本は次のサイトで閲覧することができる：<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/20839/004>

Plate 1a ブグト碑文の計測図 (片山・吉田)

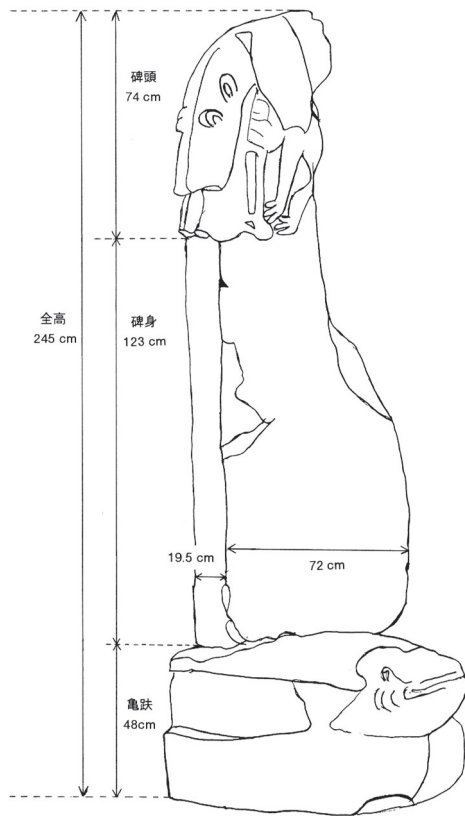


図 1

[本論文は科学研究費基盤 B (課題番号 17H02399 代表 井谷教授) による研究成果である]